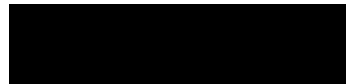


スペイン
バリャドリード大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部
国際言語文化学科 3年 ヨーロッパ研究コース



スペインのバリャドリード大学で過ごした約 5 ヶ月を振り返ってみると自分自身はとても成長して、それでもまだ伸びしろがあることがわかった。スペインという日本から向かうには 1 日かかる異国の地で生活をした体験は時と金を超えた貴重なものであり、私にとっての見える人生の財産になったのは間違いない。この私にとっての財産を学校生活、日常生活、スペイン留学を通して、この 3 つのトピックに分けて報告する。

まず学校生活について述べる。私の通った大学はバリャドリード大学である。4 つのキャンパスがあり、その中でも私はセゴビアキャンパスに通った。とても歴史のある大学だが、セゴビアキャンパスは比較的新しく、歩いてユネスコの世界遺産である水道橋、セゴビア大聖堂、アルカサルに行くことができる。このような充実した環境で勉学に励めたことをとても光栄に思う。私は社会科学・司法・コミュニケーション科学学部観光学科に所属し、授業は「企業管理と人事管理」、「観光統計」の 2 つを受講した。「企業管理と人事管理」では企業を始めるために必要なこと、大切なこと、そしてどのように雇用するのかを学び、分析し解説をして、「観光統計」ではエクセルや SPSS といった統計アプリを使って観光データを用いて分析解説をした。これらの授業ではスペイン語を用いて授業が行われ、言語能力だけでなく、スペインやヨーロッパの視点から見る授業が行われることで、日本では学べない知識を得た。さらに県立大学と同じく少人数授業であったため、先生と生徒の距離がとても近かった。生徒たちは積極的に先生に疑問を投げかけ、先生はそれに答えていた。自分からわからないことを先生と他の受講生に聞くことで先生は解説をしてくれて、また他の受講生は勉強会に誘ってくれた。私自身、先生と他の受講生とコミュニケーションを取ることが授業の理解度を深めるために必要不可欠であったと思う。このように授業を通して学んだことは言語能力だけでなく、生きた知識そして生きる術もまたそうである。他にも大学が主催するイベントでロッククライミングに挑戦したり、異文化交流会では各国の料理を振る舞ったりした。



次に日常生活について、私は2人のスペイン人女性とルームシェアをした。2人はセゴビアやマドリードを案内してくれるだけでなく、スペインでは日常的にどのようなものを食べているのか、思想を持っているのか、行動をするのかを教えてくれた。他にも授業の予習復習をする際に先生が書いた文字で読めないところや理解できない授業の内容や、料理のレシピなどをスペイン語でわかりやすく意味を教えてくれた。日本にも興味を持ってくれたので情報交換をしたりもした。もちろん一緒に住んでる上でお互い不満を持つことがあったが、その時はちゃんと話し合い、解決案を考えた。日本にいたときは自分の意見を主張するのが得意ではなかったため、ちゃんと気持ちを伝える力は自分だけでなく相手を守る力でもあることを身にしみて感じた。家族以外の人と、ましてや多国籍の人と共存するためには、お互いの理解が必要であることがわかった。これは視野を広くしても言うことで、今後のグローバル社会においても大事である。



最後にスペイン留学を通して、私はスペイン語という手段を使って、スペインでしか味わえない体験、知識、思想、文化を知ることができた。単純にいうととても楽しかったし、これこそかけがえない思い出である。さらに自分の家族を知る機会にもなったと思う。私は今まで母方の家族に会ったことがなかった。なぜなら日本には家族がいなかったからだ。しかしスペインにはマドリードとバルセロナに母方の家族がいたため、私は訪れ、そこでどのような成り行きでペルーからマドリード、バルセロナに住むことになったのか、母とはどのような関係であるのか、そして自分の家族の歴史についてご飯を食べながらお話をした。その時間は「両親」を知ること、すなわち「自分」を考えさせられる時間でもあった。この経験は私にとっては日本では味わえない経験であり、私を手厚く支援してくれたスペインの家族はもちろん、その機会を設けてくれた日本にいる私の家族にも感謝している。留学生や私をサポートしてくれるメンターらは私のことを「segunda familia」(第二の家族)とってくれた。私も心からそう思う。

このようにスペインで過ごした約5ヶ月は私にとっては見えない人生の財産であり、これからも私の中で生きていく。このような貴重な体験をさせてくれた大学、家族、友人に心から感謝をしたい。私はこれから得たものをさらに強化し、これからも勉学に勤しみ続け、将来的に多文化共生の支援をしていきたい。